

通信教育部メディアスクーリング
経済学（2017年度撮影）

経済学

（資本と利子から経済を考える）

第2回

法政大学 法学部

水野和夫

マルクスの資本

・ ・ ・ $G-W-G'$ の永続する1個の循環過程

▶ 貨幣権力の蓄積は潜在的に無限

資本とは、永続的に循環する一個の過程

『資本の〈謎〉』（ディヴィッド・ハーヴェイ、原著2011、森田 成也/大屋 定晴/中村 好孝/新井田 智幸訳、作品社、2012）

第2章 どのように資本は集められるのか？

資本流通とその潜在的諸制限、p.62

資本とは、モノではなく、貨幣がより多くの貨幣を求めて永続的に循環する一個の過程

（参考）『資本論入門』（D・ハーヴェイ、原著2010、森田 成也/中村 好孝訳、2011、作品社）

『資本論入門』
p.140

私は、ポケットから貨幣を出して、それを流通に投じて、より多くの貨幣を稼ぐことができれば、資本を流通から引き上げることができる。それゆえ、あらゆる貨幣が資本であるわけではない。

（※スライドは上記のように訂正します。→8行目「それを流通に投じて」）

資本とは、ある特定の仕方で使用される貨幣である。

資本の定義は、貨幣権力をこの流通様式に投げ入れるという人間の選択から切り離すことはできない。

『資本論入門』
p.140

しかし、ここから、一連の問題が提起される。まず、なによりも、資本はどれくらいの増加分を生み出すことができるのかという問題がある。

貨幣権力の蓄積は潜在的には無限だということ。

マルクスいわく

資本家は「この運動の自覚せる担い手」であり、「貨幣所持者は資本家になる。彼の一身、またはむしろ彼のポケットは、貨幣の出発点であり帰着点である」。

『資本論入門』
p.141

つまり、資本家は、ただ交換価値を得るためにだけ、使用価値を生産するのである。

資本家は、何の、あるいはどんな種類の使用価値が生成されるのかに、本当のところは関心がない。

資本家に剰余価値を獲得させてくれるかぎり、どんな種類の使用価値でもよい。

(※スライドは上記のように訂正してあります。→2行目「どれくらいの増加分を」)

G-W-G、『資本論入門』
p.135

資本主義的生
産システムの
虚構性、p.143

G-W-Gが意味をなすのは、その結果として価値が増加する場合のみ、すなわち、 $G(\text{貨幣}) - W(\text{商品}) - G + \Delta G(G-W-G')$ にある場合のみであり、この追加分たる ΔG が剰余価値である。

「W」:ドイツ語「Ware(ヴァーレ)」の頭文字で「商品」。

「G」:ドイツ語「Geld(ゲルト)」の頭文字で「貨幣・お金」。

資本は運動する価値である。

〈資本の過程的定義〉

しかし、実際には、価値はここでは過程の主体になるのであって、この過程のなかで絶えず**貨幣と商品をいう形態を交互にとりながら**その大きさそのものを変え、原価値としての自分自身から剰余価値を突き放して、**自分自身を増殖させる**のである。

価値が剰余価値をつけ加える運動は、価値自身の運動であり、価値の増殖であり、したがって**自己増殖**だからである。

価値は、それが価値だから価値を生む、という**神秘的性質**を受け取った。

資本主義的生産システムはまさに**この虚構に依存**している。

『資本の
〈謎〉』p.63

無限の過程

18世紀半ば以降に支配的になった資本流通の形態は産業資本あるいは生産資本の形態である。

この場合、資本家は一定量の貨幣を持って出発し、技術や組織形態を選択し、市場にでかけて必要な量の労働力と生産手段(原料、物的プラント、中間生産物、機械、エネルギーなど)を購入する。

労働力は、資本家の監督下で遂行される生きた労働過程を通じて生産手段と結合される。その成果は商品(W)であり、それは、その所有者、つまり資本家によって市場で売られ、利潤が獲得される。

次の日には、資本家は、(略)前日に上げた利潤の一部を新たな資本に転換し、拡大された規模で過程を新たに開始する。技術や組織形態が一定のままならば、このことはより多くの労働力と生産手段の購入を意味し、この第二期の過程においてさらに多くの利潤を上げる。

そして、この過程はこのように続いていく。無限に。

『資本の
〈謎〉』p.65

なぜ資本家は利潤を快樂に費やさずに拡張のために再投資するのだろうか？

⇒「競争の強制法則」(私が再投資せず競争相手がそうしていたら、やがて私は事業からの撤退を余儀なくされるだろう)

⇒貨幣は私的個人によって領有されうる社会的権力の一形態
貨幣は内在的限界を持たない社会的権力の一形態。所有できる土地の量には限界がある。

(参考)「世界史は陸と海のたたかい」(カール・シュミット)

長期的停滞、
p.64

長期的な停滞は資本主義にとって危機の兆しとなる。

⇒日本とドイツの10年国債利回りがマイナス

自然利子率がマイナス

ケインズの「利子生活者の安楽死」

- ▶ ゼロ金利は、資本の希少性が解消した結果であって、理想の状態

ケインズ『一般理論』・・・「利子生活者の安楽死」

利子率生活者階級の安楽死
(p.344)

土地の希少性と資本の希少性

過渡期的な存在

革命を経由しない大きな社会改革

しかし、このことは利子率生活者階級の安楽死を意味し、さらに資本の希少価値を利用して支配力を蓄積しつづけようとする資本家階級の安楽死をも意味する。

資本の所有者は、資本の希少性にもとづく準地代としての利子を受け取る。それはあたかも土地の所有者が、その土地の希少性にもとづいて地代を得るのと同じであるが、土地の希少性については必然性が存在するが、資本の場合にはそのような内在的な意味における希少性は存在しないとケインズは考える。

ケインズは、資本主義における利子生活者階級は、過渡的な存在にすぎず、資本の蓄積にともなってやがては消滅する運命を辿ると考える。

利子生活者の安楽死によって、経済全体として非常に大きな便益を獲得することができる。それは革命を経由しない、大きな社会改革であるというケインズの主張が展開される。

ケインズ「わが孫たちの経済的可能性」 [1930]

・・・「財産としての貨幣愛」

(p .395)

かくて人間の創造以来はじめて、人間は真に恒久的な問題—経済上の切迫した心配からの解放をいかに利用するのか、科学と指数的增长によって獲得される余暇を賢明で快適で裕福な生活のためにどのように使えばよいのか、という問題に直面するであろう。

ケインズの心配
(p .396)

しかし余暇の時代、豊かな時代を、不安感を抱くことなしに期待できるというような国もなければ国民もないと、私は考えている。なぜなら、われわれはあまりに長いこと楽しむようにではなく、賢明に努力するように訓練されてきたからである。

財産としての貨幣愛 (p .397)

富の蓄積がもはや高い社会的重要性をもたないようになると、
(略) **財産としての貨幣愛**は、ありのままの存在として、多少いまいましい病的なものとして、また、震えおののきながら精神病の専門家に委ねられるような半ば犯罪的で半ば病理的な性癖の一つとして、見られるようになるだろう。「もちろん、そのようになってもなお、満たされない強烈な目的意識をもって盲目的に富を追い求めるような人々が、(略) 大勢いるだろう。

理想主義VS.現実主義

- ▶ **ケインズ**・・・理想主義者、「人間はこうあるべきだ」、ゼロ金利の解釈
- ▶ **マルクス**・・・現実主義者、「これが人間だ」、資本の定義